

下訳：田窪行則
協力：片岡喜代子、宮地朝子

人間であればみな、ある成長段階になると、重い障害がない限り、自分が接している言語を話し理解できるようになる。言語音声・手話動作（以後、説明を簡単にするために「音声」と記す）と意味とを結びつける我々のこの能力の基底には言語機能 (language faculty)がある。これがノーム・チョムスキーが半世紀以上前に創始した研究プログラムの最も基本的な作業仮説の一つである。チョムスキーの研究プログラムの目的はこの言語機能の初期状態(initial state)と定常状態(steady state)の性質を発見することである。彼の仮説では、音声と意味とを結びつける能力の基底にある生得的能力である言語機能は初期状態では人間という種に共通しているものであり、主な「成長」が終わった定常状態では、人間の言語経験に従って、生得的性質によって課される制約の範囲内で異なっている。この研究プログラムのもう一つの関心は当該の普遍的性質が言語機能にとどまらず、自然の法則とどのように関係づけられるか、また、どのように個別言語の性質が獲得されるかである。本書の主たる関心は言語機能に関する仮説に対して厳密な経験的テストをどのように課することができるかである。私は、確定的 (definite) (=明確な)、範疇的 (categorical) (「A か A でないか」のようにはっきりしている) 予測がどのように導出できるか、我々の確定的かつ範疇的な予測に非常に近い実験結果がどのようにして得られるかに関する方法を提案する。つまり、本書の目的は、この意味での厳密科学として言語機能を研究することが可能であることを示すことである。以下、この意味での厳密科学としての言語機能の研究を単に言語機能科学と呼ぶ¹。

本書の主目的は言語機能科学の方法論の概念的基盤を提示し、かつ具体的な仮説と実験に基づいてその経験的な例示を行うことである。この方法論に従って、具体的な普遍的仮説、個別言語の仮説にもとづいた予測を導出し、実験をデザインし、実験結果の解釈を行う。ここで提案する方法がチョムスキーの研究プログラムとどのように関係しているかは本書の主たる関心ではない。そのことに関する議論を実質的な章（第二章以降）に含めることは、この本全体の議論の流れをかなり悪くすると思う。したがって、この本で提案する方法論の背景とそれのチョムスキーの研究プログラムとの関係についてこの序章で、簡単に述べておきたい。

本書の提案は言語の研究に関して「内在主義的アプローチ」および「方法論的自然主義」の厳密な解釈を採用したことから帰結するものである。内在主義的アプローチを採用することにより私は、外在化されたものとしての言語 (Chomsky (1986)の用語では E-言語) ではなく、その定常状態 (Chomsky (1986)の用語では I-言語) を含んだ言語機能を研究対象とする。「方法論的自然主義」のアプローチを採用することで、自然科学が対象を研究するのと同じように言語機能を研究するべきであるという立場をとる (Chomsky (1986, 1995)、および Chomsky (2000) 所収の論文等を参照)。

チョムスキーが自分の研究プログラムを言語機能の科学として企図したことは明らかである。(例えば、Chomsky 1965: Ch. 1 を参照) しかしチョムスキーの、特に 1980 年代の半ばからの、著作からは、検証可能性、および、言語機能の性質の発見を目的とする研究において厳密な検証可能性がいかにして追求されるべきかに関する真剣な関心が明らかに欠如している(ように思われる)。このことはチョムスキーが方法論的自然主義を追求し、「言語」および言語機能に対する内在主義的研究プログラムを採用しているという事実から見ると不思議なことであると思うかもしれない²。というのは、これらのアプローチを採用することから

¹ 「厳密科学としての」は冗長であるが、言語機能科学の厳密科学としての性格を強調するために、あえて「厳密科学としての言語機能科学」と呼ぶときがある。

² チョムスキーの方法論的自然主義 (methodological naturalism) は方法論的二元論 (methodological

出てくる最も重要な帰結には、検証可能性の重要性を認識することが含まれるからである。下記で述べるように、言語機能科学において事実と仮説は分離することが出来ない。検証可能性の重要性は（仮説から）予測が導出できるか否かの重要性と密接に結びついている。

本書の内容は、生成文法という企てが目標としているものはなにか、またそれに関連する多くの問題の本質を明確にした開拓者チョムスキーの著作に多くを負っているが、検証可能性の追求をどこまで厳密に行うかを研究プログラムの最も基本的な部分とするという点で、いわゆるチョムスキアンの研究プログラムとは大きく異なる³。この点を強調するために、本書の研究プログラムは、「言語機能科学」と呼び、生成文法（や生物言語学）とは呼ばない。

以下の章で例示する研究プログラムは物理学者のリチャード・ファインマンが以下のように要約している方法を採用して、言語機能の性質を発見しようとするものである。

一般的に我々は次のような方法で新しい法則を探します。まず、推測をします。次にその推測の帰結を計算して、我々が推測したこの法則が正しければなにが含意されるかを見ます。つぎにこの計算の結果を実験や経験によって自然と比較します。うまくいくかどうかを観察と直接比較するわけです。実験と合わなければ、間違っているわけです。この単純な言明こそが科学の要です。あなたの推測がどれくらい美しいかは関係ありません。あなたがどれくらい頭がいいとか、誰がその推測を

dualism) と対置されてだされた概念である。チョムスキーの自然主義的アプローチは、この意味で、（仮説の形成だけでなく仮説の検証に関しても、と私は理解している）方法論の重要性を否定する彼の長年に渡って取っている立場と矛盾しない。この立場は、例えば、Chomsky 1988: 190 で述べられている。

（下に、関連する箇所を引用する。これは、Hoji 2015 の原文にはない。以下、引用する場合、この断りはいれない。）

“By "naturalism" I mean "methodological naturalism", counterposed to "methodological dualism": the doctrine that in the quest for theoretical understanding, language and mind are to be studied in some manner other than the ways we investigate natural objects, as a matter of principle.” (Chomsky 1995. “Language and Naturel,” *Mind*, Vol. 104. 413. January 1995: 28)

日本語訳

「自然主義」(naturalism) という語によって私が意味するのは、「方法論的自然主義」(methodological naturalism) であり、これは、「方法論的二元論」(methodological dualism) と対置されるものである。方法論的二元論とは、理論的理解の探求において、言語や心は一原理上の問題として一自然物を研究する方法とは異なる方法で研究されるべきであるとする教義である。（チョムスキー言語基礎論集、福井直樹編訳、岩波書店、2012: 325）

Chomsky (1988: 199) states as follows, in the context of answering a question.

“As for my own methods of investigation, I do not really have any. The only method of investigation is to look hard at a serious problem and try to get some ideas as to what might be the explanation for it, meanwhile keeping an open mind about all sorts of other possibilities. Well, that is not a method. It is just being reasonable, and so far as I know, that is the only way to deal with any problem, whether it is a problem in your work as a quantum physicist or whatever.

“There are certain fields like psychology where people do carry out extensive study of methods of investigation. There are other fields like physics where you do not study methods of investigation. So at MIT the physics department does not have a course in experimental methods, but many psychology departments spend a lot of time on what they call methodology. Well, there is a lesson there, but I won't draw it.”

Schütze 1996: 210, footnote 1 states:

“Chomsky (personal communication) believes that research in linguistics ought to follow that in the natural sciences, where (in contrast to the social sciences) “almost no one devotes attention to ‘methodology’ .” Obviously, I disagree.”

³ (Not translated here.) Ch. 8: section 8.2 contains further remarks addressing possible objections against what is voiced here and related issues.

したかとか彼の名前とかは関係ありません。実験と合致しなければ間違っているのです。それがすべてです。(Feynman 1965/94: 150)

ファインマンはこの点をいろいろなところで強調している。たとえば次の箇所である「科学の原則—それは定義といってもよいが—は次のように言える：すべての知識の検証は実験である。実験こそが科学的「真実」の唯一の審判である（ファインマン物理学講義:1-1 ファインマン 1963:2 に再掲）。私はこの科学の基本的な方法—これを「推測-計算-比較」の方法と呼ぼう⁴—を言語機能の研究においても厳密に採用することが可能であると提案したい。方法論的自然主義者であることは必ずしも、確定的な予測を導出し、厳格な検証可能性を追求することを自分に課すことにはならない。しかし、ファインマンの言う「推測-計算-比較」の方法を採用すれば、確定的な予測の導出と厳格な検証可能性の追求は義務となる。

ここで提案する方法論によれば、我々の仮説から導出される予測は実験によって確かめることになる。これが言語機能科学の唯一の生産的で実行可能な方法であると主張するわけではない。しかし、従来物理学やその関連諸分野以外では有効に用いることは不可能であると信じられてきたこの方法が言語機能の研究に対してもいかに有効で有望であるかを本書で私は示そうと思う。

実験は予測を検証するために行われる。「言語」と言語機能に対して内在主義的研究方法を採用して、個々の話し手の言語機能の普遍的性質を研究対象とするということは、すなわち、我々の言語機能科学における実験は個々の話し手に関しての予測を検証するということになる⁵。「推測、計算、比較」の方法にしたがえば、我々の予測は可能な限り確定的でなければならない。でなければ、実験（観察）結果と予測を厳密に比較することはできないからである。そこで当然疑問となるのは、我々の予測とは何に関する予測であり、また言語機能の普遍的な側面を発見しようとする研究プログラムにおいてデータとみなされるのはなにかということである。

どのような研究対象であってもなにが証拠になり、なにが反証になるかに関する先験的な制約などは存在しない。このことは言語機能の研究に関しても言える。しかし、どのような証拠を問題にしたとしても、その証拠は研究対象—我々の場合は言語機能の普遍的な性質—に対しての洞察を与えるものでなければならない。我々は言語機能が音声と意味を関係づける能力の基底にあると仮定しているので、音声と意味との関係に関するインフォーマントの認容性判断を言語機能の性質に関する我々の仮説の妥当性をテストするために使えるものとみなしてもいいだろう。もちろん、別のタイプの証拠が同様の目的を果たし、我々の仮説を支持する証拠となるという可能性は排除するものではない。

実際、インフォーマントの内省による認容性判断（研究者のものも含む）は生成文法の伝統においては主たるデータの役割を果たしてきている。Chomsky (1986:37) は以下のように述べる。

確かに母語話者の認容性判断は言語の研究において常に証拠を提供しつづけるであろう⁶。それは人間の視覚の研究において知覚判断が常に証拠を提供しつづける

⁴ (Not translated here.) The general names given to this method include the *hypothetico-deductive* method.

⁵ 言語機能の初期状態は普遍的なものと仮定されている。定常状態に於ける言語機能（Chomsky 1986での I-言語）（それは、各個人の心・頭のなかにある）には、言語体験に基づいて獲得された性質が含まれている。

⁶ ここで、"language" というのは、言語機能を指している。Third Texas Conference on Problems of Linguistic Analysis in English, May 9-12, 1958, published in 1962 by the University of Texas に収録されているチョムスキーの発言は、私には、少なくとも 1958 年頃のチョムスキーの考えを—1950 年代、1960 年代、そしてその後発表されたものの中に典型的に見られる考え方よりも—より直接的に反映しているように思

のと同じであるのだが、このような証拠だけが優先的な地位を占めるという事態はなくなることが望ましいと思う人がいるかもしれない⁷。しかし、言語の理論がこのような認容性判断を説明できなければ、明らかに失敗とされるべきである。実際、

える。このことは Hoji 2010: footnote 5 で指摘されている。

(下に、関連箇所を引用する。)

Hoji 2010: footnote 5 states:

“Chomsky's remarks in *Third Texas Conference on Problems of Linguistic Analysis in English* seem to point directly to what he had in mind at least around 1958, in my view more directly than what we typically find in his writings in the 1950s and 1960s and the subsequent years. One of many such remarks by Chomsky in that volume is reproduced here (p. 168 of the 1958 volume); see also Chomsky (1986: 36-37).

Hill: Linguistic intuition is itself a system, almost a complete grammar. If it is good enough, why bother with any other grammar?

Chomsky: Because I am interested in explaining intuition. If you cannot accept this as the purpose of linguistic study, I am lost. I would like to get a theory which will predict intuitions.

Obviously, informant judgments are not the only source of evidence for or against hypotheses about the Computational System. If one seeks evidence elsewhere, one must articulate how such ‘evidence’ is related to the hypothesized properties of the language faculty so as to ensure, and hopefully maximize, testability of the hypotheses. I take that to be a minimal methodological requirement for using evidence other than informant intuitions in empirical research concerned with the properties of the Computational System.

(もうひとつの関連箇所とその日本語訳)

“To be sure, the judgments of native speakers will always provide relevant evidence for the study of language, just as perceptual judgments will always provide relevant evidence for the study of human vision, although one would hope that such evidence will eventually lose its uniquely privileged status. If a theory of language failed to account for these judgments, it would plainly be a failure; we might, in fact, conclude that it is not a theory of language, but rather of something else. But we cannot know in advance just how informative various kinds of evidence will prove to be with regard to the language faculty and its manifestations, and we should anticipate that a broader range of evidence and deeper understanding will enable us to identify in just what respects informant judgments are useful or unreliable and why, and to compensate for the errors introduced under the tentative working assumption, which is indispensable, for today, and does provide us with rich and significant information.” (Chomsky 1986: 37)

知覚判断が人間の視覚の研究に対して関連する証拠を常に提供するであろうということと全く同様に、母語話者の判断が言語の研究に対して関連する証拠を常に提供するであろうこともまた確かである(但し、こういった証拠は、いずれはそれが持つ絶対的な特権的地位を失うことになるのが望ましいのであろうが)。もし、ある言語理論が母語話者の判断を説明することが出来なければ、この理論が失敗作であることは明らかであろう。実のところ、それは言語の理論ではなく、何か別のものに関する理論であると結論することさえ出来るかも知れない。しかし、様々な種類の証拠が言語機能やその具現化に関して一体どの程度有益な情報を与えてくれるのかということについては、前もって知ることは出来ない。であるから、我々はより広範囲にわたる証拠やより深い理解が得られれば、インフォーマントの判断が一体どのような点で有益なのか、あるいは信頼できないのか、そして、それはなぜなのか、といった事柄を明らかにすることが可能になり、暫定的な作業仮説——これは、現在の研究段階では不可欠であり、また豊かで有意義な情報を正に提供してくれてもいる——の下でもたらされた誤りを補正することも可能になるであろう、という見通しを持って研究を行うべきなのである。(チョムスキー言語基礎論集、福井直樹編訳、岩波書店、2012: 216)

⁷ 「こういった証拠が…いずれ、それが持つ絶対的な特権的地位を失った」時には、我々は、被験者の判断以外の何かについてははっきりとした予測を仮説から導出できるようになっていることだろうと思う。その予測は、言語機能に関する仮説と、我々がその時点ではっきりとした予測の対象にしているものに関しての仮説から、導出されるようになっているだろう。

その場合それは言語ではなく他のものに関する理論というべきなのである。

したがって、私はインフォーマントの音声と意味の関係に対する内省判断が言語機能科学において我々がなしうる予測であるとみなし、他のタイプのデータが効果的且つ有意義に使えるかいはひとまず考慮外に置いておくことにする。特定の言語の個々の話し手の認容性判断を言語機能の普遍的性質に関する証拠、あるいは反証、として見るというのは内在的アプローチを取ることの帰結の一つなのである。

言語機能は直接観察することはできない。それはその性質に関する仮説をたて、その仮説と「観察できるもの」との関係に関する仮説を立てることによって間接的に「観察」することができるのみである。したがって、言語機能の性質に関する仮説は抽象的にならざるを得ない。それらは言語機能の一部をなすと仮定されている対象に関する仮説である。したがって仮説がなければ、言語機能の普遍的側面を明らかにする事実は存在しないといってもよいかもしれない。

個々の話し手の特定の言語に関する一連の認容性判断が言語機能科学における事実となるのは我々の仮説によってそれが予測されるから、すなわち理論的な説明を与えられるからであるということがわかると、言語機能科学においては事実と仮説が分かちがたいものであることに気が付く。なぜかという、上述の考察によれば、あるものが事実であることの必要条件はそれが仮説によって予測され、その予測が実験によって確かめられているということだからである。すなわちこの意味での事実と仮説の分離不可能性があるため、言語機能科学は非常に初期の発展段階においてさえ理論に重きを置く研究プログラムの最たるものとなる。

さて、言語機能の普遍的な性質の反映としての個々の話し手の特定の個別言語の認容性判断に関して、どのようにすれば確定的で範疇的な予測をすることができるのか、また、どのようにしてそのような予測に合致する実験結果を得ることができるのか、と疑問に思う人がいてもおかしくない。以下の章ではこれら及び関連する疑問に対する回答を与え、実際の実験にそって具体的な例示をする。これらの章は言語機能科学が本質的に理論志向的であるにも関わらず、いかにして厳格な経験的な研究プログラムとなりえるのかを示す試みである。ここで提案される方法論によると、我々は「厳然とした事実(hard facts)」によって「厳然とした予測(hard predictions)」を確かめ、その同定には仮説による予測が必須であるにも関わらず、その「厳然とした事実」を、理論中立的に述べるということになる。ここで”hard predictions”および”hard facts”のhardはFeynman (1999:198-199)によった。

強い核相互作用においては、厳密にかつ完全に述べられた色荷クォークとグルーオンの理論がある。この理論の明確な検証は技術的に困難であり、実行が非常に難しいものである。私は理論にゆるい部分があるに違いないととても強く感じている。この理論に反する証拠はないのだけれど、厳然とした(hard)予測を厳然とした(hard) (=具体的で確かな) 数字によって確かめられないかぎり進歩は望めないだろうと思う。

本書は言語機能科学において厳然とした予測を導出し、厳然とした事実を同定するにはどのようにしたらよいかを示すための試みである⁸。

2章～4章では言語機能科学の理論的基礎を述べる。2章は個々のインフォーマントの認容性判断に関して、言語機能の普遍的な性質に関してどのような確定的かつ範疇的予測ができるのか、そして、どのようにしてその予測と合致する実験結果を得ることができるのかを議論する。2章の議論により、インフォーマントの認容性判断はスキーマ (schemata) の形で見る必要があることがわかる。さらに、このスキーマには二つのタイプがあることがわかる。

⁸ Schütze and Sprouse 2013 では、認容性判断が (言語学の分野で) どう取り扱われているかが論じられている。そこでの議論ならびに Schütze and Sprouse 2013 と Schütze 1996 で挙げられている参考文献から、この分野で認容性判断がどのように扱われているかに関する一般的な理解を得ることができる。ここ (=Hoji 2015) で提唱されている方法とこの分野で一般的に行われているやり方との違いは、内在主義の立場と「推測、計算、比較」の方法に対する強い思い入れの有る無しに起因しているように思える。

これらは、一つは*スキーマ（スタースキーマ）、今一つは OK スキーマ（オーケースキーマ）と呼ばれる。両者には次のような違いがある。前者は、そのスキーマに従うすべての例文が二つの言語表現に関係するある特定の解釈で完全に認容不可能であることが予測され、後者は、そのスキーマに従う例文のうちいくつかは、二つの言語表現に関係するある特定の解釈で、すくなくともある程度は認容可能であることが予測される。これら二つのタイプの予測の違いを認識することが言語機能科学の重要な鍵の一つである。この二つのタイプの予測の組み合わせを予測されたスキーマ上非対称性 (predicted schematic asymmetry) と呼ぶ。我々の実験結果が予測されたスキーマ上非対称性に合致したとき、我々は「確認済スキーマ上非対称性」を得たという。私は、確認済スキーマ上非対称性が言語機能科学の最小の事実単位であるとみたい。

第 3 章では音声と意味の関係に関する話し手の認容性判断に対してどのようにして確定的で範疇的な予測を導出することができるかを考察する。第 2 章で考察した内容から、このような予測を導出するためには少なくとも普遍的な仮説（すなわち、言語機能の普遍的な性質に関する仮説）、および、個別言語に関する仮説（すなわち個別言語の性質に関する仮説）を要することを認める必要がある。さらに加えて、インフォーマントが認めた特定の解釈の基底にどのような形式的性質があるのかに関する仮説がなければならない。そのような仮説をここでは橋渡し仮説 (bridging hypotheses) と呼ぶ。最後に言語機能の性質に関してインフォーマントの認容性判断が言語機能のなにを明らかにしているのかに関しての最低限のモデル化 (minimal articulation) が必要になる。

インフォーマントの、言語機能の性質の反映としての音声と意味の関係に関する、認容性判断について、確定的な予測を導出するためには、その理論によって、普遍的仮説、個別言語的仮説、および橋渡し仮説を定式化できるような言語機能に関する理論が必要である。我々は Chomsky(1993)の言語機能の計算システム (CS : Computational System) のモデルを採用する。このモデルは我々の仮説を定式化し、それらの仮説から確定的で範疇的な予測を導出することを可能にするからである。CS に関するチョムスキーのこのモデルでは意味の基底には LF (Logical Form) 表示と呼ばれる心的標示がある⁹。この CS に関するモデルで仮定されている唯一の構造形成操作は二つの統語的対象 (syntactic objects) を合わせて一つにするものである。したがって、我々はこの構造形成操作によって基本的かつ普遍的な構造関係を定義することができる。これによりどの表層的音列がどの LF 表示に対応するかに関する仮説、より具体的にいうと、表層的音列における二つの言語表現に対応する二つの統語的対象の LF 表示レベル（以後単に「LF」）における構造的関係、に関する仮説を定式化することが可能になる。インフォーマントの認容性判断が言語機能の性質に関してなにを明らかにしているかのモデル化としては上山(2010)のインフォーマントの認容性判断行為に関するモデルを採用する。

音声と意味の関係に関する個々のインフォーマントの認容性判断に関して検証可能な予測をするためには以下のものを具体的に与えればよい。(i) LF における形式的{対象/関係}に関する普遍的仮説、(ii) 表層の音列における二つの言語表現に対応する二つの LF の統語対象 (LF objects) の間の構造関係 (iii) 二つの表現に関するどのような解釈が(i)で言及した LF における形式的 {対象/関係} に基づいていなければならないかについての橋渡し仮説。LF において、FD(a,b)という形式的対象 (formal object) が存在すると仮定する。ここで a、b の構造条件として a は b を c-統御 (構成素統御) しなければならないと仮定する¹⁰。(iii)で言及した解釈に関しては、 α と β という二つの言語表現の解釈に特定の依存解釈があると考え。橋渡し仮説によりそのような依存解釈は FD(LF(α), LF(β))に基づかなければならないとされる。ここで α 、 β は特定の言語表現である。LF(α)および LF(β)とはそれぞれ α という表現、

⁹ (Not translated here.) See Section 3.3: (1) and remarks thereabout.

¹⁰ (Not translated here.) See Section 3.3 for what is meant by *c-command*.

β という表現に対応する LF の統語対象 (LF objects) である。

第 4 章では予測に合致する確定的、範疇的な実験結果がどのようにして得られるかを考察する。そのための重要な要件の一つは我々の実験をメイン仮説とサブ仮説、メイン実験とサブ実験という概念で理解することである。これらの概念はインフォーマント分類の基盤としての役割を果たすことになる。これは第 6 章、7 章でメイン仮説の妥当性に関してメイン実験の結果の解釈を決定するのに使われる。二つのタイプの予測の基本的な非対称性を認識し、我々の実験をメイン仮説、サブ仮説、メイン実験、サブ実験という概念でもって理解することが、言語機能科学における確定的で範疇的な実験結果を得ることを可能にするのである。

第 5 章では 2-4 章で概観した研究方法に基づいたオンライン実験の一般的なデザインと実験結果の見方を紹介する。第 6, 7 章は英語 (6 章)、日本語 (7 章) で行った実際の実験に言及しながら、言語機能科学を実践することが可能であることを示す。第 8 章は本書の要約と結びである。

本書にはウェブサイトがあり、そこでは本書の以下の章で議論されている実験デザイン、実験結果のより詳しい内容を見ることができる。このウェブサイトは、他の人が、本書の経験的主張の妥当性を本書で示しているよりもより徹底的に確かめられるように作られており、したがって、本書の提案する方法論の妥当性を間接的に確かめることができるようになってきている。このウェブサイトでは、他の資料とともに、実験結果の「生データ」を提供しており、関心のある人は自分の選んだ統計的技術を使って実験結果を分析することができる。本書および付属ウェブサイトの目的は、上述の意味で言語機能を厳密科学として研究することがどのようにして可能であるかを、私見では、初めて、示すことである。これが実際に可能であるならば、言語機能科学は社会科学や行動科学よりも、物理学に近いものとなる。このことは心の他の側面を扱う研究に対して極めて広範囲にわたる影響を与える。これまでの他の研究には、個々のインフォーマントの文の認容性判断に関して確定的で、検証可能な予測を導出でき、またその予測が実験結果によって確かめられると主張したものはない。また、私の知る限りでは、これまでの研究には、言語機能の普遍的な性質の反映としての個々のインフォーマントの認容性判断に関する確定的で範疇的な予測にのっとなって実験をデザインし、その実験結果を解釈し、そして安定した実験結果を得られるようにするにはどうしたらよいかを論じているものはない。

物理学やその関連領域以外では、確定的な予測を導出して、その予測を実験によって検証することは不可能であると一般に思われている。私はこれが可能であることを主張し、示そうと思う。本書のスローガンは「厳密科学としての言語機能科学は本当に可能なのだ！」である。夢見る人と思われるかもしれないが、私は一人ではない。この本を読んだ人のなかから私達とともに歩んでくれる人が出て来てくれることを願っている。

References

- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of language*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam. 1988. *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam. 1993. A Minimalist Program for linguistic theory. In: Hale, Kenneth, and Samuel Jay Keyser (eds.), *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam. 1995. "Language and Nature," *Mind* 104: 1-61.
- Chomsky, Noam. 2000. *New Horizons in the Study of Language and Mind*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Chomsky, Noam. 2004. *The Generative Enterprise Revisited*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam. 2012. *The Science of Language: Interview with James McGilvray*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Feynman, Richard. 1963. *Six Easy Pieces*, Basic Books, New York.
- Feynman, Richard. 1965/1994. *The character of physical law*, The Modern Library, New York. (The page references are to the 1994 edition.)
- Feynman, Richard. 1999. *The Pleasure of Finding Things Out*, Basic Books, New York.

- Feynman, Richard, Robert Leighton, Matthew Sands. 1963. *The Feynman Lectures on Physics Volume 1*, Addison-Wesley Publishing Company, Reading, Mass.
- Hoji, Hajime. 2010. "Hypothesis testing in generative grammar: Evaluations of predicted schematic asymmetries," *Journal of Japanese Linguistics* 16: Special issue: In Memory of S.-Y. Kuroda, pp. 25-52.
- Schütze, Carson. 1996. *The empirical base of linguistics: Grammaticality judgments and linguistic methodology*, University of Chicago Press, Chicago.
- Schütze, Carson and Jon Sprouse. 2013. "Judgment data," in Robert J. Podesva and Devyani Sharma, eds., *Research Methods in Linguistics*, Cambridge University Press, Cambridge, 27-50.